

思いや願いを実現する過程で考え方表現する力を育む生活科学習指導の工夫 — 幼児期までの遊びと低学年での学びをつなぐ単元モデルづくりを通して —

坂町立坂小学校 沖 菊子

研究の要約

本研究は、「思考力、判断力、表現力等の基礎」を育む生活科学習指導の工夫について考察したものである。文献研究により、「思考力、判断力、表現力等の基礎」は、幼児期の遊びを通した学びの中で養われており、これをつなげていくことが低学年の教育活動に求められていることが分かった。そこで、幼児期までの遊びと低学年での学びをつなぐ単元モデルを作成し、「学びの芽生え」を連続、発展させていくことができる授業づくりについて検証した。その結果、①思いや願いを実現させる環境構成②児童の学びを支える教師の働きかけ③学びを自覚できる表現活動の三つの手立てにより、児童は「見付ける、比べる、たとえる、試す、見通す、工夫する」活動を通して気付きの質を高め、考え、表現することができた。これらのことから、生活科の学習において、幼児教育の「環境を通して行う教育」の支援の在り方を取り入れた環境構成の工夫や教師の働きかけを行い、表現活動を充実させることは、「学びの芽生え」を「自覚的な学び」につなぎ、児童の考え方表現する力を育むことに有効であると分かった。

I 主題設定の理由

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説生活編（平成30年、以下「29年解説」とする。）によると、今回の改訂で更なる充実を図ることが期待される点について、具体的な活動を通して、どのような思考力等が發揮されるか十分に検討する必要があることが示された。また、学習内容、学習指導の改善・充実についての一つに、育成を目指す「思考力、判断力、表現力等」が具体的となるよう各内容項目を見直したことが示され、思考力等を育む指導の充実が求められていることが分かる。

また同書において、幼児期の教育において育成された資質・能力を存分に發揮させ、各教科等で期待される資質・能力を育成する低学年教育に滑らかに連続、発展させることができることが明記された。そして、幼児期に育成された資質・能力と小学校低学年で育成する資質・能力とのつながりを明確にし、そこで生活科の役割を考える必要があると示された。これにより、生活科が幼児期の教育と小学校教育とを円滑に接続する機能をもつことが示されたと言える。

そこで、本研究では、幼児期の教育を通して育まれた「思考力、判断力、表現力等の基礎」をつなぐための手立てを示した単元モデルを作成し、実践することを通して、「考え方表現する力」を育むことができると考え、本主題を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 思いや願いを実現する過程について

「29年解説」では、「生活科は、一人一人の児童の思いや願いを実現していく一連の学習活動を行うことにより、児童の自発性が發揮され、能動的に活動することを大切にしている。」¹⁾と示されている。また、児童が好奇心や探究心、対象への興味や親しみ、憧れなどからくる「やってみたい」「知りたい」「できるようになりたい」といった自分の強い思いや願いをもつことができれば、単元を通して主体的に意欲的に学ぶことが可能になると示されている。そして、生活科の学習過程として、以下のように示された。

①思いや願いをもつ ②活動や体験をする ③感じる・考える
④表現する・行為する（伝え合う・振り返る）

朝倉淳（2018）は、生活科の学習過程は思いや願いを実現する過程であり、人は何らかの思いや願いを実現しようとするとき、ただ思い願うのではなく、自ら考え、判断し、行動すると述べている⁽¹⁾。

これらのことから、「思いや願いを実現する過程」とは、児童一人一人が「やってみたい」「知りたい」「できるようになりたい」などの思いや願いを実現するために、主体的、能動的に考え、判断し、行動

する学習過程であると考えられる。

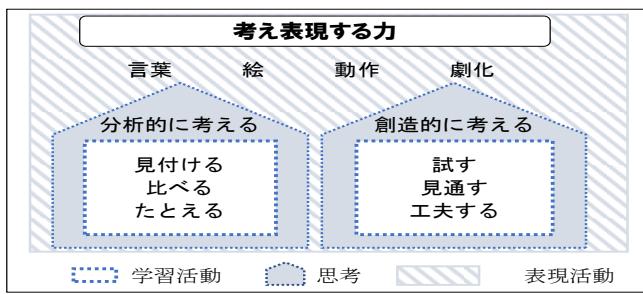
2 考え表現する力とは

「29年解説」では、教科目標に「身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようになる。」²⁾と思考力、判断力、表現力等の基礎を育成することが明記された。そこで、本研究では、生活科で育成する「思考力、判断力、表現力等の基礎」を「考え表現する力」と表すことにする。

「29年解説」には、「考える」とは、見付ける、比べる、たとえるなどの学習活動により、分析的に考えることと、試す、見通す、工夫するなどの学習活動により創造的に考えることであると示されている。また、「表現する」とは、気付いたことや考えたこと、楽しかったことなどについて、言葉、絵、動作、劇化などの多様な方法によって、他者と伝え合ったり、振り返ったりすることであると示されている。

これらのことから、本研究における「考え表現する力」とは、「見付ける、比べる、たとえる、試す、見通す、工夫する」学習活動により、分析的、創造的に考えたことを、「言葉、絵、動作、劇化」などの方法によって表現する力とする。

なお、同書では、低学年の児童は、活動と思考が一体的であり、その活動は総合的なものであると示されている。朝倉（2018）は、生活科では、活動、思考、表現などが、一体的に行われたり繰り返されたりすることが重要であると示されている⁽²⁾。このことから、本研究において「見付ける、比べる、たとえる、試す、見通す、工夫する」学習活動は、思考でもあると捉え、表現はそれらが一体となって表出されたものとする。以上の説明を図1に示す。



3 考え表現する力を育む学習指導とは

「29年解説」では、具体的な活動や体験を通して気付いたことを基に考えることができるようになる

ため、見付ける、比べる、たとえる、試す、見通す、工夫するなどの多様な学習活動を行うようにすることと示された。「試す、見通す、工夫するなど」の学習活動は、今回の学習指導要領の改訂により新たに加わったものである。これは、気付いたことを基に考えるための学習活動の充実により、気付きを質的に高めていくことが求められているためであるとされている。

これらのことから、考え表現する力を育む学習指導とは、教師が六つの学習活動が行われるように意図した授業づくりを行うことにより、児童の気付きの質を高める指導であると考える。

なお、「考え表現する力を育むこと」ができた児童の姿を次のように捉えることとする。

より質の高い気付きをもっている姿は、六つの学習活動により、一つの気付きが関連付けられた気付きとして高まっている姿である。その気付きを言葉、絵、動作、劇化で表現している姿が見取られれば、その児童は分析的・創造的に考え表現しており、考え表現する力を育むことができたと考える。

4 幼児期までの遊びと低学年での学びをつなぐ単元モデルについて

（1）幼児期までの遊びと低学年での学びとは

上之園公子（2018）は、幼児期の教育と児童期の教育には、教育課程の構成や目標、方法、学びの形態等に大きな違いがあると述べている。また、幼児期の教育は環境と関わりながら遊びを通して総合的な学びを引き出していくところを特色としている。そして、具体的な活動と一体となった無自覚な学びの中に「学びの芽生え」を育んでいくことにその特色があると述べている。一方、児童期の教育は、各教科の目標や内容に沿って選定された教材によって、目標への到達を重視した指導を行っていくところにその特色があると述べている⁽³⁾。両者の違いについてまとめられたものを表1に示す³⁾。

表1 幼児期の教育と児童期の教育の違い

	幼児期の教育	児童期の教育
教育課程の基準	幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携認定こども園教育・保育要領	小学校学習指導要領
	5領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現）	各教科（国語・社会・算数・理科・生活・音楽・図画工作・家庭・体育・外国語）・特別の教科（道徳・外国語活動・総合的な学習の時間・特別活動）
主な教育課程の構成原理	経験カリキュラム（生活や経験を重視）	教科カリキュラム（学問体系を重視）
教育目標の設定	方向目標（教育の方向付けを重視）	到達目標（目標への到達を重視）
主たる教育的アプローチの方法	遊びを通した総合的な指導	各教科の目標・内容に沿って選定された教材による指導
学びの形態	学びの芽生え（無自覚な学び）	自覚的な学び

表1の「学びの形態」の違いに関して、「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」（平成22年）では、「『学びの芽生え』とは、学ぶということを意識しているわけではないが、楽しいことや好きなことに集中することを通じて、様々なことを学んでいくことであり、幼児期における遊びの中での学びがこれに当たる。一方、『自覺的な学び』とは、学ぶということについての意識があり、集中する時間とそうでない時間（休憩の時間等）の区別がつき、与えられた課題を自分の課題として受け止め、計画的に学習を進めることであり、小学校における各教科等の授業を通した学習がこれに当たる。」⁴⁾と示されている。

以上のことから、本研究では、「幼児期までの遊び」を「学びの芽生え（無自覺な学び）」、「低学年での学び」を「自覺的な学び」と捉え、これを生活科の中でつなげていく単元モデルを作成していくこととする。

（2）「考え方表現する力」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のつながりについて

平成29年3月、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園・保育要領が同時改訂（改定）され、育みたい資質・能力が「知識及び技能（基礎）」「思考力、判断力、表現力（基礎）」「学びに向かう力、人間性等」の三つで整理され、育てるべき資質・能力が幼児期から高等学校まで貫かれ、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示された⁴⁾。

「29年解説」では、第1学年においては、幼稚園教育要領等に示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりとして、幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を受け継いでいく必要があると示されている。

幼稚園教育要領（平成29年告示）によると、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とは、5領域のねらい及び内容に基づいて幼稚園教育において育みたい資質・能力が育まれている幼児の具体的な姿であり、特に5歳児後半に見られるようになる姿であるとされている。下記に示す。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿
①健康な心と体②自立心③協同性④道徳性・規範意識の芽生え⑤社会生活との関わり⑥思考力の芽生え⑦自然との関わり・生命尊重⑧数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚⑨言葉による伝え合い⑩豊かな感性と表現

本研究で育むことをを目指す「考え方表現する力」は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の中

の「思考力の芽生え」「豊かな感性と表現」と関連していると考えた。この解説を図2に示す⁵⁾。

思考力の芽生え
身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友だちの様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。
豊かな感性と表現
心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友だち同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

※「考え方表現する力」と関連する箇所に下線（稿者による）

図2 「考え方表現する力」と関連のある「思考力の芽生え」と「豊かな感性と表現」

図2から、「考え方表現する力」は、幼児期に考えたり、予想したり、工夫したりしながら遊び、感じたことや考えたことを表現する中で芽生えていることが分かる。この「学びの芽生え」をつないでいくためには、教師が児童の入学前からの育ちと学びを理解し、これらを発揮させるような学習の過程を創り出していくことが大切であると考える。

（3）幼児期までの遊びと低学年での学びをつなぎ、考え方表現する力を育む手立て

「29年解説」では、遊びを通じた総合的な学びから小学校教育への円滑な接続を図るために、児童の学習環境についての見直しが必要であると示されている。そして、幼児期からの学びと育ちを生かす活動を意図的に設定することで、児童が成長を実感しながら、自ら考え、判断し、行動することを繰り返すことが大切であると示された。これらを具体化する手立てについて以下に三つ示す。

ア 思いや願いを育む環境構成

「29年解説」に、一人一人の思いや願いの実現に向けた活動を展開していくためには、例えば、人、社会、自然との出会い方を工夫することが考えられると示されている。

朝倉（2018）は、環境を通して行われる幼児期の教育のノウハウを、生活科をはじめ小学校教育でも生かしていきたいと述べている⁶⁾。

幼稚園教育要領（平成29年告示）には、「環境を通して行う教育は、遊具や用具、素材だけを配置して、後は幼児の動くままに任せるといったものとは本質的に異なるものである。もとより、環境に含まれている教育的価値を教師が取り出して直接児に押し付けたり、詰め込んだりするものでもない。環境の中に教育的価値を含ませながら、児童が自ら興

味や関心をもって環境に取り組み、試行錯誤を経て、環境へのふさわしい関わり方を身に付けていくことを意図した教育である。」⁵⁾とある。

これらのことから、生活科では、児童の思いや願いを育むために幼児教育の「環境を通しての教育」の考え方を受け継ぎ、教師が教育的価値を含ませた環境構成を工夫することが大切であると考える。それにより、児童が主体的に考えて行動していく中で「学びの芽生え」を發揮し、幼児期までに育まれてきた資質・能力を連続させていくことができると言える。

イ 児童の学びを支える教師の働きかけ

「29年解説」には、生活科の学習指導の特質の一つに、教師が活動や体験の中で感じたり考えたりしている児童の姿を丁寧に見取り、働きかけ、活動の充実につなげることが大切であると示されている。また、児童が感じ取った事柄を、教師が尋ね返したり問い合わせたり共感したりするなどの言葉かけや働きかけをすることによって、児童は比較したり、分類したり、関連付けたりなどして解釈し把握とともに、試行したり、予測したり、工夫したりなどして新たな活動や行動の道筋を創り出していくと示されている。

道上喜美子（2018）は、児童は活動しながら思考し、思考したことを表現したり次の活動に生かしたりすることから、児童の動きを漠然と見ないで、児童の表情やつぶやき、活動から、一人一人の考え方や気付きを見取ろうとする教師の姿勢が必要であると述べている。また「どうしたいのかな」「どうして～したの」と対話的に関わることで、児童の考え方や気付きを見取り、それをさらに広げたり深めたりする支援が可能となると述べている^{⑦)}。

これらのことから、生活科における教師の働きかけは、児童一人一人の気付きや思考を見取り、思考を促したり、新しい活動や行動の道筋を創り出したりするものであると言える。そしてそれは、「学びの芽生え」を「自覚的な学び」へとつなげていく役割を果たすものであると言える。

ウ 学びを自覚できる表現活動

（7）生活科における表現活動について

「29年解説」では、生活科は、児童が身体を通して直接働きかける体験の楽しさを味わうことや、活動や体験したことを表現し、考えることができるようすることを重視していると述べられている。また同書では、児童は体験活動と表現活動を相互に繰り返しながら、学習の質を高めていくことや、表現

し、考えることを繰り返しながら、気付きを自覚し、確かなものにしていくことが述べられている。そして、気付きを自覚したり、関連付けたり視点を変えて捉えたりすることが気付きの質を高めることであると述べられている。

これらのことから、生活科における表現活動とは、児童に思考を促し、学習の質を高め、児童に気付きを自覚させ、「学びの芽生え」を「自覚的な学び」へと発展させていくものであると言える。

（1）学習カードの開発

児童が活動の中で考えたことや気付いたことを自覚しながら整理できる学習カードを開発した。カードには、「みつけたよ、ためしたよ、かんがえたよ、うまくいったよ、うまくいかなかつたよ」の5種類のタイトルがあり、タイトルの表現に沿った思考にポイントを絞って絵と短い文章で表現できるようになっている。

カードに付けた五つのタイトルは、「見付ける、比べる、たとえる、試す、見通す、工夫する」という六つの学習活動を児童にとって分かりやすい言葉にしてまとめたものである。このタイトルを付けることで、児童が分析的に考えたことだけでなく、「～したら～になった」というように、結果を予測しながら試したり、先を見通したり、原因と結果に着目したりしながら、創造的に考えたことをより自覚的に表現できるようにした。また、児童が、短時間で記入できるようA5サイズにし、五色に色分けをして選択しやすいよう工夫した。図3に、話型の例を示す。

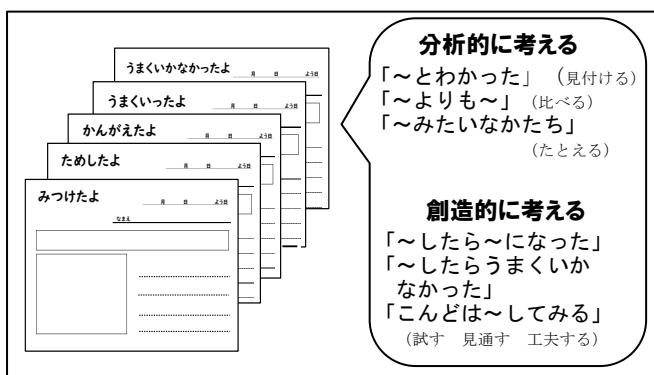


図3 六つの思考を表現する学習カードの話型の例

以上、ア、イの手立てにより学びの芽生えを連続させ、イ、ウの手立てにより自覚的な学びへと発展させていく、考え表現する力を育んでいく。これを「幼児期までの遊びと低学年での学びをつなぐ単元モデル」として次頁図4に示す。

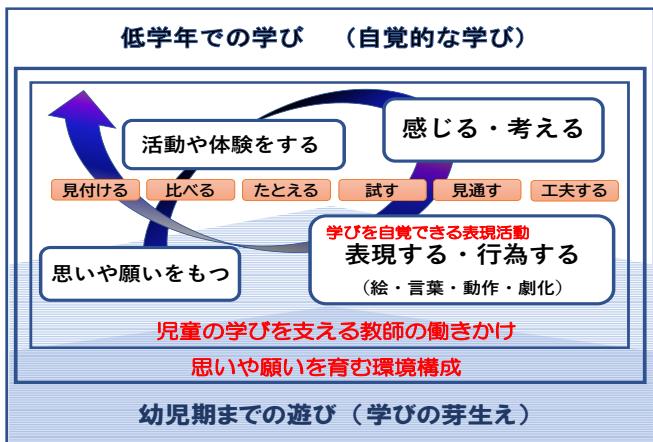


図4 幼児期までの遊びと低学年での学びをつなぐ単元モデル

III 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

幼児期の教育を通して育まれた「思考力、判断力、表現力等の基礎」をつなぐための手立てを示した単元モデルを作成し、実践することで、児童の考え方表現する力が育まれるであろう。

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法について、表2に示す。

表2 検証の視点と方法

検証の視点		方法
が力考 でをえ き育表 たむ現 かこす とる	①思いや願いを育む環境構成は有効であったか。 ②児童の学びを支える教師の働きかけは有効であったか。 ③学びを自覚できる表現活動は有効であったか。	行動観察（写真に残す、児童名簿につぶやきをメモする） 児童の発話、話合い活動、児童とのやりとり 学習カード

IV 研究授業について

- 期間 令和元年11月28日～令和元年12月10日
- 単元名 つくろう あそぼう
- 対象 所属校第1学年（1学級27人）
- 目標

校庭や公園で集めた葉や木の実、身の回りの材料を使っておもちゃを工夫してつくったり、遊び方を工夫したりして遊びの面白さや自然の不思議さに気付き、安全に気を付けて、みんなで遊びを楽しむことができるようとする。

○ 指導計画

時	主な学習活動	期待される学習活動	表現活動
1	○教師がつくれた、秋の自然物でできたおもちゃで遊ぶ。	見付ける 試す 見通す	学習カード 遊び
2	○自分たちが見付けた秋の自然物でおもちゃをつくる（個人） ・どんぐりごま ・がつき ・まつぼっくりのけん玉 等	比べる 見通す 工夫する 見付ける	学習カード 製作 遊び

3	○秋の自然物と身近な材料を使ってつくれるおもちゃを考える。 ○一緒につくる人とグループになる。	比べる たとえる 見通す	そうだんタイム 学習カード
4 5	○楽しいおもちゃになるように工夫してつくり、つくれたもので遊ぶ。	見付ける 比べる たとえる 見通す 工夫する	そうだんタイム 学習カード 製作
6	○つくれたおもちゃで友だちと一緒に遊びながら、秋のおもちゃまつりに向けて、もっと楽しく遊べるようにおもちゃのつくり方や遊び方、ルールを工夫する。	見通す 工夫する	そうだんタイム 学習カード 製作 遊び
7	○秋のおもちゃまつりの計画を立て、準備をする。	見通す 工夫する	ひみつかいぎ 学習カード
8 9	○秋のおもちゃまつりで遊ぶ。	見付ける 比べる 見通す 工夫する	学習カード
10	○「つくろうあそぼう」の学習の振り返りをする。	見付ける 比べる	すごいねカード ありがとうカード ふりかえりカード

V 研究授業の分析と考察

1 思いや願いを育む環境構成は、考え方表現する力を育むことに有効であったか

（1）環境構成の工夫

本研究授業は、生活科の内容「（5）季節の変化と生活」とのつながりをもたせた「（6）自然や物を使った遊び」を基にした単元で行った。

本単元では、児童が思いや願いの実現に向けて主体的、能動的に活動する中で、六つの学習活動を十分に行うことができる環境構成を工夫した。表3、図5に具体を示す。

表3 環境構成の具体と効果

環境構成の具体	効果
空間的支援	・児童の動線を妨げることなく、児童の思いに沿った活動が展開されやすい。
	・椅子を引いて立ったり座ったりする動作がなく、動きがスムーズにできる。
	・話合い活動がしやすい。
材料・用具の配置の工夫	・遊んだり製作したり床を使ったりする動きが自由にでき、活動の幅が広がる。
	・製作に必要な材料や用具を種類ごとに分け、選びやすく配置することで、自由に使いながら児童が試行錯誤することが可能になる。
時間的支援	・材料や用具が自由に使えることで、児童が自発的に活動する機会が増える。
	・十分な活動時間をもたせることで、児童が試行錯誤しながら製作する機会をつくったり、活動に没頭する経験をさせたりできる。
休憩時間の利用	・生活科の時間に興味をもったことを発展させたい児童のために、教室の後方にコーナーを設けることで、試したり工夫したりする機会が増える。



図5 環境構成の具体

これらの環境構成により、児童が材料やこれまでの経験、本、教師のつくったおもちゃを基に考え出したおもちゃは以下のとおりである。

○まつぼっくりのけんだま	○まつぼっくりのつり
○あきのおかしやさん	○どんぐりボーリング
○むずかしいめいろ	○はっぱのしんけいすいじやく
○どんぐりのまといれ	○けいさんどんぐり
○どんぐりのパラシュート	○ふねきょうそう
○あきのシーソー	※遊びの名前は児童が考えたもの

(2) 環境構成による児童の活動の様子

児童は、2～4人でグループをつくり、活動した。このうち、「ふねきょうそう」の遊びを考えたグループは、材料を入れるために置いていた水槽を見付け、テレビで観たことがある「小川の葉っぱ流し競争」のような遊びをしたいと考えた。右上図6に活動の様子を示す。

①の活動から児童の「見通す」「工夫する」「試す」思考、②から「見付ける」「見通す」「比べる」表現、③から「見通す」「試す」思考、④から「比べる」「見付ける」思考、⑤から「見通す」「試す」「工夫する」「比べる」思考、⑥⑦から「見通す」「工夫する」思考を、遊びを創り出す活動の中で発揮させていることが見取れた。

以上のように、教師の意図的な空間的、時間的支援によって、児童が思いや願いを実現するために何度も試してみることができる環境を構成できた。そして、この環境構成により、児童が比較したり試行したりしながら活動する中で、葉っぱを吹く感触を楽しんだり、遊び自体の面白さに気付いたり、遊びのルールを工夫して創り出す面白さに気付いたりするなど、気付きの質の高まりが見られた。

これらのことから、環境構成により「学びの芽生え」を連続させることができ、考え方表現する力を育むことができると分かった。

他のグループにおいても、すべての児童が製作の過程において、思いや願いの実現に向けて考え、表現することができていた。

2 児童の学びを支える教師の働きかけは、考え方表現する力を育むことに有効であったか

「まつぼっくりのつり」グループは、二人で活動していた。二人とも、困ったことがあっても自分からはなかなか表現しにくい児童であった。次頁の図7は、第4時、5時の製作の様子である。

教師は、①②のように問いかけることで、児童が困っている様子に気付き、③のように一緒にやってみて難しい理由を整理した。そして④⑤のように問

第3時	グループで楽しく遊べる遊び方を考える。
	○児童が考えたルール 大きな水槽に水を張って落ち葉を浮かべ、息を吹いて葉っぱを水槽の端まで動かし、早くゴールした方が勝ち。
第4、5時	楽しいおもちゃになるように工夫してつくり、つくったもので遊ぶ。
	①児童たちは、トイレットペーパーの芯を2、3本つなげて長くし、息を送るものを作る。 ②しかし、葉っぱはほとんど動かず、落ち葉は大きくて重いから動かないのではないかと考える。 ③そこで、小さい葉っぱや木の実（メタセコイア、ひのき、ムクロジ、どんぐり）を入れてみる。 ④どんぐりは沈んだが、小さい実のいくつかは浮かんだ。そして小さい木の実の方がより進むことに気付く。 ⑤しかし、息を送るものから息が葉にあまり伝わっていないことに気付き、広告紙を細く丸めて息を送るものをつくる。息を吹いてみると、こちらの方がよく動くと気付き、しばらく遊ぶ。 教師がこのグループの近くに行ったときに、児童は自分たちが思っていたよりも息で落ち葉を動かすのは難しかったと話していた。教師と一緒に遊んでみて、葉っぱがよく進む息の吹き方について一緒に考えた。
第6時	(おもちゃ祭りに向けて)もっと楽しく遊べるようおもちゃのつくり方、遊び方、ルールを工夫する。
	⑥児童たちは、初めて考えていた葉っぱ引きの遊びをおもちゃまつりでお客さんにしてもらうのは、息をたくさん吹かないといけないから難しいのではないかと考えるようになった。 ⑦一人の児童が小枝を見付け、小枝の先で葉っぱを送る方法を思いつく。グループで相談し、葉っぱを小枝で送るルールに変え、遊びの名前を「はっぱふき」から「ふねきょうそう」に変えることを決めていた。初めに考えた遊びとは変わったが、ふねきょうそうも楽しく遊べることが分かり、喜んでいた。

図6 「ふねきょうそう」グループの活動の様子

いかけることで、児童は考えながら試し、紐の太さに目を向けさせることができた。また、輪ゴムに着目させることで新しい方法に目を向けさせ、二人の思いや願いの実現に近付けることができた。

このように、教師が児童の活動の様子をよく観察し、問い合わせたり新しい方法に目を向けさせたりする働きかけをしたことで、児童は比較して考えたり、予測して試したり、更に工夫したりしながら活動し、一つ一つの気付きを関連付けられた気付きへと高めることができた。もし教師が初めから児童が効率よく進められるように導いたりやり方を示したりしていれば、これらの学習活動、思考、表現を引き出すことができなかつたと思われる。教師の「見守る」「関わる」のバランスの取れた働きかけにより、児童に多様な学習活動を経験させ、考え方表現する力を育むことができると分かった。

児童AとBは小枝の先に毛糸や紐を結び付け、結び付けた反対側で輪っかをつくっていた。これを釣り竿にし、まつぼっくりを引っかけて釣る遊びにしようと考えていた。しかし、実際に釣つてみると、まつぼっくりの笠は上に向かって開いているため、うまく毛糸や紐の輪っかが引っかからず、釣ることが難しい様子であった。

教師： ①どうしたの？
児童A： うまくつくれません。
教師： ②どうして？
児童A： 輪っかがまつぼっくりに引っかからない。
教師： (やってみて) ③本当だね。輪っかを笠に引っかけるのが難しいね。
児童A, B： (まつぼっくりを置く向きを変えたりしながら色々試すが、輪っかは引っかからない。)
教師： ④どうして引っかからないのかな？
児童B： (紐が太くて、まつぼっくりの笠の隙間に入りにくくことに気付き) ひもが太い。
教師： 本当だね。⑤Aさんのはどう？
児童A： 細い。(児童Bよりも細い毛糸を使っていた)
教師： 細くても難しい？
児童B： (だまってやってみながらうなずく)
教師： (笠に引っかけても釣り上げるときに落ちてしまう様子を見て) 本当だね。じゃあこのやり方では難しかったから他の釣り方を考える？
児童A, B： うん。

この後、他の児童が図書室で借りてきていた秋の自然でつくる工作の本や、教師がもっていた本を紹介して、教師は他のグループへと行った。

しばらくしてこの二人のところに戻ってみると、まつぼっくりの方にたこ糸を巻き付けて、それを釣り竿に付けたU字型の金具で釣るやり方を考えていた。その後、二人は一生懸命、まつぼっくりにたこ糸を巻き付けて結んでいた。

二人はこの日から、休憩時間も使ってまつぼっくりにたこ糸を結び付け、秋のおもちゃ祭りに向けて準備していた。しかし、たこ糸を結ぶのは時間がかかり、なかなか量が増えないことから、⑥教師と一緒に用具のコーナーから輪ゴムを見付けた。すると、二人で工夫して上手く引っかかりをつくり、速くたくさんつくることができるようになり、輪ゴムの便利さに気付いていた。釣るものがたくさんつくれたことから、二人は初めに考えていた、釣るのが難しい釣り遊びから、二十秒で何個釣れるかを二人で競争できる釣り遊びへと変えていた。

図7 「まつぼっくりのつり」グループへの働きかけ

3 学びを自覚できる表現活動は、考え方表現する力を育むことに有効であったか

(1) 児童が選択した学習カードからの検証

毎時間、活動の後5~10分の時間で学習カードに表現させた。図8は、第2時、4, 5時、6時の学習のめあてと児童が選択した学習カードの人数の集計である。

学習のめあて			
第2時	秋のおもちゃをじぶんでもつくってみよう (個人)		
第4, 5時	たのしくあそべる秋のおもちゃをつくろう (グループ)		
第6時	もっとたのしくあそべるように、つくりかた あそびかた、ルールをかんがえよう		
各時間に児童が選択したカード N=27 (人)			
	第2時	第4, 5時	第6時
みつけたよ	2	2	2
ためしたよ	10	3	1
かんがえたよ	6	7	5
うまくいったよ	8	6	15
うまくいかなかったよ	5	9	4

※第2時は2枚カードを書いた児童がいるため合計が異なる

図8 児童が選択した学習カードの人数の集計

図8から、それぞれの活動内容によって、児童が選ぶカードに次のような傾向が見られた。第2時で初めておもちゃづくりをしたときには「ためしたよ」が多く、第4, 5時でグループに分かれておもちゃづくりをしたときには、「うまくいかなかったよ」「かんがえたよ」が多い。そして、第6時で秋のおもちゃまつりに向けて遊びを工夫、改善した時間には、前時までに試行錯誤したことを生かし、「うまくいったよ」が多くなっている。

これらのことから、選択しているカードのタイトルに児童の思考が表れており、タイトルが思考を整理することの助けになっていることが分かる。表4に記述の一部を示す。

表4 学習カードの記述の一部

学習カードのタイトル	学習カードへの記述
みつけたよ	つばきのみでけんまだまをつくったら、ちっちやいからむずかしいよ。(試す、見付ける、比べる)
ためしたよ	さいしょにつりをひもでやつたらぜんぜんつれなかつたから、まつぼっくりにひもをつけました。(試す、見付ける、工夫する)
かんがえたよ	スタートとゴールをトイレットペーパーのしんをきてボンドではこにはりました。(試す、工夫する)
うまくいったよ	けんだまは、ひものながさでむずかしさがかわりました。(見付ける、比べる)
うまくいかなかったよ	まつぼっくりをテープでとめてもつかなかつたから、またこんどむしんでつけるよ。(見付ける、比べる、見通す、工夫する)

※()内は、表現から見取ることができる児童の思考

(2) 個の記述に焦点を当てた検証

次頁の図9は、C児の学習カードである。C児は、話したり書いたりすることが苦手な児童であり、9月までは教師が側に付き、C児の考えを引き出しながら表現活動をすることが多かった。どちらのカードも文章だけでは考えたことが表現しきれていないが、製作活動とカードの記述によって、①では「見付ける」「比べる」「工夫する」思考を、②では、「試す」「工夫する」思考を表現することができている。効果をもたらした要因として、用紙のサイズをA5にしたことにより、児童が活動の後、短時間で表現できたことや、活動中に考えたことをそのまま表現しやすかったことが考えられる。

さらにC児は、第6時の学習カードで「考えたよ」のカードを選び、遊びのルールを考えたことを「よくかんがえてかいたり、あそんでかんがえてやればできました。」と記述している。C児は第2時を除くと毎時間「かんがえたよ」のカードを選択している。このため、遊びの中で考えることや、考えることにより上手くできるということが、児童の中で価値付けられたと捉えることができる。このことから、カードのタイトルが表現することを苦手とする児童の思考を促し、さらに気付きを自覚させることにつながっていることが分かる。

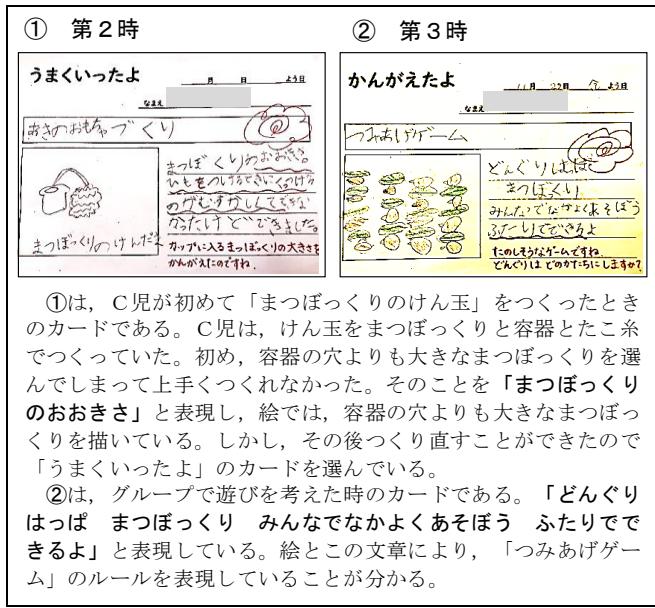


図9 C児の学習カード

図10は、D児のカードの記述である。D児は、文章で表現することが得意な児童である。

時	学習カードへの記述
第2時	「どんぐりのバラシュー」 どんぐりのバラシューをしました。 いきおいよくふってうえにしたらかくできました。 (試す、工夫する、見付ける)
第4、5時	「あきのどんぐりのバラシュー」 ふくろのさきをいとでしばってしまって、 かぜがとおらなくてたかくできませんでした。 (試す、比べる、見付ける)
第6時	「あきのどんぐりのバラシュー」 どんぐりバラシューのさきにどんぐりをつけて、 ふくろをうえにあげると、どんぐりのおもさでふくろが ひらくとおもいました。 (見付ける)

() 内は、表現から見取ることができる児童の思考

図10 D児の学習カード

D児は、このタイトルのある学習カードを使うことで、「楽しかったです」「うれしかったです」といった情意的な気付きよりも自分が試してみてどうであったかという因果関係に着目した気付きについて表現するようになった。

教師は、毎時間全体での振り返りの時間に、黒板に学習カードと同じタイトルの帶カードを活用し、児童の発言を分類して板書していった。これは、「試す、見通す、工夫する」のような第1学年の児童にとって抽象的で分かりにくい思考が、具体的にはどのようなものなのか自覚できるように意図して行ったものである。これにより他の児童にもD児のような因果関係に着目した表現方法について、意識をもたせることができた。

以上のことから、5種類の学習カードを使った表現活動は、児童の思考を整理して表出させる中で、

児童に学びを自覚させることができ、有効であったと言える。また、この表現活動が気付きの質を高めることにつながり、考え方表現する力を育むことができたと言える。

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

本研究を通して、幼児期までの遊びと低学年での学びをつなぐ単元モデルを活用した授業を行えば、児童が思いや願いの実現に向けて自ら考え方判断し行動する経験を多くさせることができ、幼児期までに育まれてきた「思考力、判断力、表現力等の基礎」を連続、発展させていくことができると分かった。これにより、児童の気付きの質を高め、考え方表現する力を育むことができた。

2 研究の課題

幼児期の教育に比べ、児童が思いや願いの実現に向けて試行錯誤を重ねることのできる時間には限りがある。十分な活動や体験の時間を保障し、学習の質を向上させていくために、活動時期を集中させるなどの単元構成の工夫や、生活科と他教科等との合科的、関連的な指導を取り入れるなどの工夫が必要である。

【注】

- (1) 朝倉淳 (2018) : 『平成29年改訂小学校教育課程実践講座』ぎょうせいp. 23
- (2) 朝倉淳 (2018) : 前掲書p. 16
- (3) 上之園公子 (2018) : 「低学年の児童の実態」須本良夫編『生活科で子どもは何を学ぶか』東洋館出版社p. 41
- (4) 木下光二 (2019) : 『遊びと学びをつなぐこれからの保幼小接続カリキュラム』チャイルド本社p. 48
- (5) 文部科学省 (平成30年) : 『幼稚園教育要領解説』フレーベル館pp. 52 - 70に詳しい
- (6) 朝倉淳 (2018) : 前掲書p. 104
- (7) 道上喜美子 (2018) : 「生活科の内容と学習材研究の方法」朝倉淳編『平成29年改訂小学校教育課程実践講座』ぎょうせいp. 69

【引用文献】

- 1) 文部科学省 (平成30年) : 『小学校学習指導要領解説生活編』東洋館出版社p. 73
- 2) 文部科学省 (平成30年) : 前掲書p. 14
- 3) 上之園公子 (2018) : 「低学年の児童の実態」須本良夫編『生活科で子どもは何を学ぶか』東洋館出版社p. 40
- 4) 文部科学省 (平成30年) : 『幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)』p. 10
- 5) 文部科学省 (平成30年) : 『幼稚園教育要領解説』フレーベル館p. 30

【参考文献】

- 文部科学省 (平成30年) : 『小学校学習指導要領解説生活編』東洋館出版社